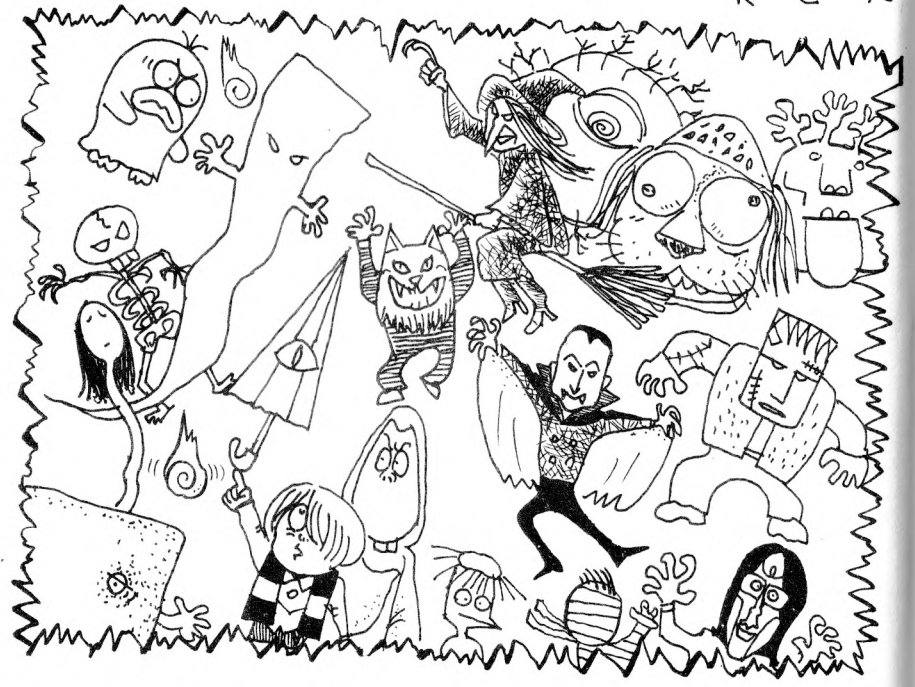


は、キリスト様であると言う確信を持た
 れました。
 その日、極楽へ帰ったおシヤカ様は、
 何か、キリスト様をやっつけるうまい手
 はないかと、夜も寝ずに考えました。
 でも、なかなかいいアイデアがうかびま
 せん。極楽におびき出して、地獄へけ落
 してやりたいのですが、そう簡単に乗っ
 てくる相手ではありません。何日もおシ
 ヤカ様は、その事であらううんうん
 いてました。
 そんなとき、一匹の小悪魔が、いたず
 らをして、極楽につれて来られました。
 その小悪魔を見て、おシヤカ様は、いい
 アイデアを考えつきました。
 「そうだ、悪魔をつかうんだ。悪魔は、
 キリスト様と仲が悪いからな。悪魔を使
 っていやがらせをしてやろう。」
 さっそく、おシヤカ様は、その小悪魔に
 案内させて、魔王サタンに会いに行きま
 した。
 悪魔たちは、おシヤカ様の申し入れに
 とびついてきました。おシヤカ様を後だ
 てにできるのですから、これ以上心強い
 ことはありません。悪魔たちは、さっそ

く、各地にちらばり、いやがらせを始め
 ました。おシヤカ様は、これを極楽から
 のぞいて、ニヤニヤしておいででした。
 さて、天国では、各地で起る悪魔た
 ちのいやがらせに手をやいていました。
 突然あちこちで起こったのもう、てん
 てこまいです。おまけに、悪魔たちは、
 人間たちにまで手を出していたのです。
 それもキリスト教信者だけに
 キリスト様は、これはおかしいとら
 みました。こんなことは、今までになか
 ったことです。そこで、天使たちに
 命じて、さぐらせました。すると、どう
 でしょう、裏で、糸を引いているのは、
 おシヤカ様だと言うではありませんか。
 キリスト様は、腹わたがにえくり返る思
 いでした。でも、弱みをにぎられても
 以上、やめろと正面から言うわけにもゆ
 きません。
 「さきそつ、おシヤカ様のつるつる、ばげ野郎
 め、きたない手を使いやがって、えい
 どうしてくれよう。」
 キリスト様は、頭をかかえてうなりまし
 ました。目は怒りにキラキラ燃えていら
 います。

「も、もう、こうなりや、やけど、目に
 は目、歯には歯だ。」
 そう言って、東洋の妖怪やら魔物やらを
 ごまんとかきあつめ、
 「お前たち、俺が許すから、おシヤカ様
 にうんと、いやがらせをしてやれ。」
 と命令しました。
 こちらも、日頃、おシヤカ様に、押えつ
 けられていたものたちですから、喜んで
 喜んで行きました。
 さあ、これを知った、おシヤカ様の、
 頭にきたの来ないの、もう大変な、けん
 まくで、悪魔たちに、もっとやれと、は
 ばをかきました。
 こうして、悪魔と妖怪の、いやがらせ
 競争は、どんどんエスカレートしてゆき
 ました。地上の人間たちは、悪魔と妖怪
 に苦しめられ、なすすべもなく次々に
 地獄に追われて行きました。その魔の手
 は、キリスト教、仏教を問わず、あらゆ
 る人間に伸び、ついに、地上には、ひと
 っ子一人いなくなってしまうました。
 その、ひとっ子一人いない地上に、キ
 リスト様と、おシヤカ様が立っていら



っしやいました。おふたりは、深いため息をつかれました。なんとゆうことをしてしまっただけは、流れる涙を、ぬぐいながら、また深いため息をつかれました。おあ、私は、なんと罪深いことをやってしまったのだ。流れる涙を、そっとぬぐい、深いため息をつかれました。二人は、しばらく、そうやって、たえずんでいらっしやいました。しかし、キリスト様、もとはと言えは原因は、あなたですぞ。突然、おシヤカ様が声を荒げて、キリスト様を非難しました。『なにを言うんです。私は、悪気があって、やったわけじゃないんです。それを、そんな、それは、責任転化ですよ。』

『いや、あの時、あなたが、あんなことをやらなければ、こんなことにはならなかつたんだ。』

『そんな、あなたなんですぞ。』



秋もたけなわのある晩のことでした。茂吉は、すつかりと寝る用意を終えて、した。音かいたし、そのとき、表の戸をたたいた。あ、こんな夜中に来るとは誰だべ。性悪のたぬきか、土間におりながら、声で、だれだ、あ、なんかいな、と大きな声で、だれだ、あ、なんかいな、と大きな声で、声で、だれだ、あ、なんかいな、と大きな声で、声で、だれだ、あ、なんかいな、と大きな声で、

風の子だ、あ、と、客えが返つて、おらあ、ま、い、ま、あ、と、客えが返つて、おらあ、変、こ、り、な、客、だ、あ、と、客えが返つて、おらあ、戸、に、し、て、あ、つ、た、か、い、棒、を、は、ず、し、て、ち、ん、こ、い、男、童、の、か、つ、こ、う、を、し、た、子、供、を、入、れ、て、あ、つ、た、わ、け、で、し、た、お、ら、あ、す、つ、か、り、だ、め、か、と、思、つ、た、さ、あ、と、座、敷、へ、あ、が、と、息、を、つ、き、な、が、ら、お、ら、ん、と、こ、さ、来、た、

『何を、自分のことは、たなにあげても、もう許せん。』

『許せんだと、許せんならどうするんだ。』

『こうするんだ。』

『そう言つて、おシヤカ様は、キリスト様にとびかかりました。』

ドテ、ボキ、ぐしゃ、

大変なけんかが、またもや始まつてしまいました。

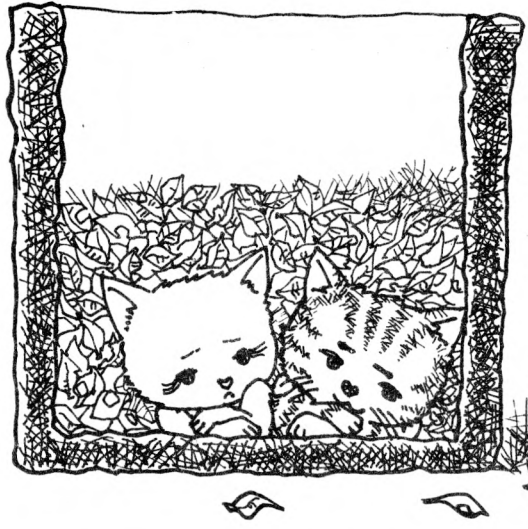
あ、あ、これでは、お話の終りにもならないじゃありませんか。



おしまい

夢道ハ

ゆきふあきふり



「こら、どろぼう！ まで、どろぼうネ。」
魚屋のおやしさんの声が、小さな小さな町に響きました。二匹のネコを追いかけているのです。一匹が大きな魚をくわえています。ドラネコと白いメス猫です。
「だれか、つかまえてくれ。」おやしさんは大股で実に恐い顔をして追っかけてきます。
角を曲がると、公園がみえてきました。二匹のネコは公園にとび込むと、石のゴミ箱に一目散に逃げこみました。幸いにゴミ箱に入っていないません。二匹のネコはじっと息を殺していました。
「こら、どこへ行ったんだ。のらぬこめ。」おやしさんがゴミ箱の前で立ちどまりました。中の二匹は小さくひっそりと目をつぶっていました。
「逃げ足のはやい猫だの。こんど会ったら承知しぬえぞ。」おやしさんはそんなことをばをはき捨てて、遠ざかっていききました。ほっとした二匹は盗んだ魚を半分ずつ食べたのでした。

ます。

「三太郎お兄ちゃん、寒いよう。」とうやら二匹は兄妹のようです。

「ああ、さっき走って汗をかいたからな。」
兄はシマシマのトラネコで少し太めです。妹はまつげがびよこんと長くて、その影がやけに物憂いのです。心のかげが、そこ一ヶ所に集まっっているようです。

ゴミ箱のふたをそっともちあげて外をみると、寒々と枯葉が横たわっていました。おちばがよりそうように抱きあつて……
「枯葉をあつめてくるゆ。ゴミ箱の中にいっばいつめたら、暖かくなるかもしれないゆ。」まっ赤なもみじがほがほがそうに見えたのです。

二匹はおちばの中にうずもれて、じっとしてしまいました。ふと三太郎は力なくつぶやきました。

「俺たちはこれじゃいけないんだ。こんなことじゃないんだ……」ため息も交っているようです。

「お兄ちゃん、夢があるから。」
「ばか！」

強い口調に妹、ユキは身を固くしました。
「どろぼうなんてして……夢とはまるっきり反対なことをしているんだ……」三太郎は落葉の束を引きちぎりました。ユキはそれからひとこともしゃべりません。そのうちユキは三太郎に背中を向けて眠ってしまいました。

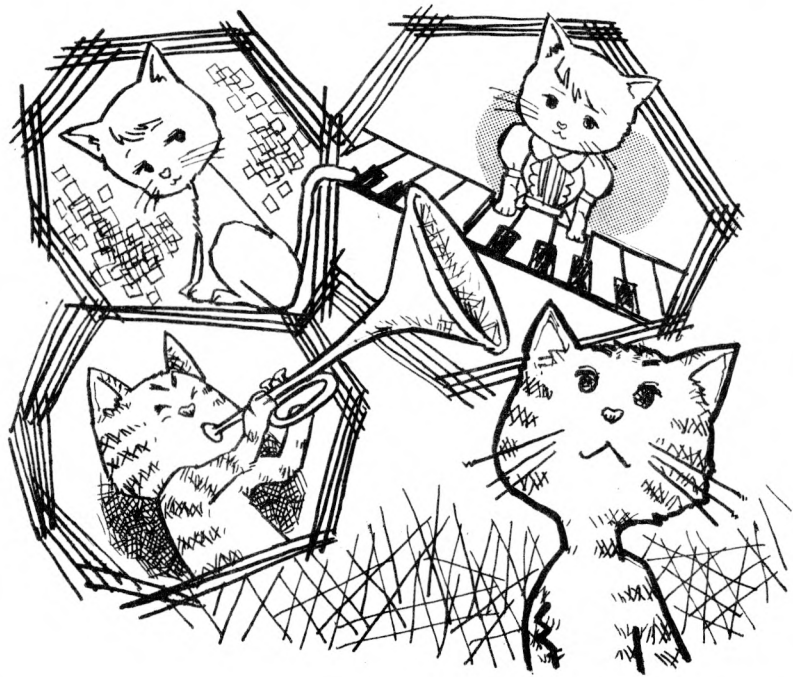
二匹の住んでいたのはこの小さな小さな町から山を三つ越えたところでした。それが、六日前二匹の家を飛びだしてきたのです。この辺は北の果ての、秋は短く冬はとてつもなく寒い土地なのです。

三太郎の幼なじみの「ヨミイ」はある女優にひろわれ、南の暖かい国へ行ってしまうたのでした。「ヨミイ」は有名な——世界でただ一匹だけのピアニストとなっていたのです。以前、写真に写ったみいを見たことがありました。三太郎の知っているみいではない、全く別人のような化粧をした彼女だったのです。毛並みもずつとリッぱになっっているし、ひげだっただけと張りついています。

そのとき、三太郎は「これじゃいけない

と思ひました。
 三太郎には夢がありました。トランペツターになる夢が。そして、夢を実現するために、三太郎は家をとびだしてきたのだから。ついでくるなと妹をとめたにもかかかわらず、兄思いのユキは、とうとうついてきてしまつたのです。
 六田がかりで山をいくつも越えて、この小さな町についたのですが、ここもやっぱり寒く夢の国ではありませんでした。そのうえ、お腹は空しく、のどは乾くし……どろぼうまでする始末です。三太郎は世の中が、とてつもなく広いことを初めて知つたのでした。

いつしか三太郎も眠っていました。三太郎はヨミイロガヒアニストとして活躍している姿を夢みていました。また、幼なかつたみい、無邪気に飛びはねていました。いつか写真の女優のひげの上ですわっているヨミイロガヒアニストと、昔のヨミイロガヒアニストと、澄き通る海を。三太郎は心すトランペツターになつてみせる。



長い眼りからさめるとさっきよりも、あたりがすつと冷たくなつていました。すつとほり夜につつまれていました。ゴミ箱のふたをそつと押しあけてみると、寒いはずです。雪がふつていました。もう十センチほど積つていました。
 「雪か。俺の夢をかりたてるなあ」
 「枯葉が落ちて、裸の木は寒そうだから、もうだぬ。暗闇から声がありました。妹ユキもいつのまにか起きていたのです。裸の木にも容赦なく、雪が舞い降りて来ます。
 「さぞ、青い葉のたくさんある木がうやましいでしようぬ。しゃべりながら、はく息がまっ白です。」

三太郎は静かに首を横にふつて「いや、その反対なんだ。青い葉は木の夢なんだ。寒い中、夢を心死で守つている木の方がつらいんだ。夢があるからつらいんだ。そのことはユキは向にも答えることができません。ユキはさっさく怒つた様子で、「ばか」と言つた理由がわからなな気がしました。
 二匹の目の前に今、枝から離れたばかりの枯葉が落ちてきました。三太郎は、その枯葉を頬にあてました。

「あたたかいぞ。この葉にもついさっきまで夢があつたんだ。枝から離れるまでは、どうやらこの葉は花になりたかつたらしい。ユキも手にとつてみました。ほんのりと葉のぬくもりが伝つてきます。夢のぬくもりが……」
 「でも、この葉は夢破れ、今散つたんだ。三太郎の声は厳しくもあり、哀しくもありました。
 雪は限りなくふつてきます。何が狂つたように……」
 小さな公園の常夜灯のしずくが、木を浮きあがらせて、葉をぬらしませます。雪の中、すべり台がのびをしてみました。
 「おれは世界で最初のネコのトランペツターとして大舞台で吹くんのだ。三太郎はゴミ箱から、飛びだし公園の灯をつくられたステージー白銀色ステージーでトランペツターを吹くまねをしました。」

三太郎は大いにのっています。曲は最高潮になります。そして、終りをとげました。風がふいてきて、枯葉同志がすり合う音がします。これは大観衆の拍手です。三

太郎は大観衆に向ってれをします。ユキも拍手をします。

「うん、キッと兄ちゃんは、トランヤッターになれるゆ。だって、草笛吹くの一番うまいもん……」

浮かれた気分が引き、雪のつめたさに回りをみまわすと、そこはただの公園でした。

「はか！草笛ぐらいふけたって、トランヤッターになれるわけないじゃないか」と妹に云おうとしてやめました。ユキにいくら怒りをぶつけてもしかたないと思っただけです。三太郎には、自分の夢が夢でなく、妄想であることを知っています。そして絶対かなぬないことも、でも……どうしてもそれをすてきれないのです。自分がなぜ、これほど夢にこだわるのか？平凡でもいいのに……夢が実現となったヨミイロへの挑戦か、それとも彼女への思慕なんだらうか……

ユキが少し調子にのりすぎてさらに拍手をします。

「ぬえ。兄ちゃんもう一回やってよ」

「ええや」三太郎は自分の気持ちをはわかない妹にためらいましたが、



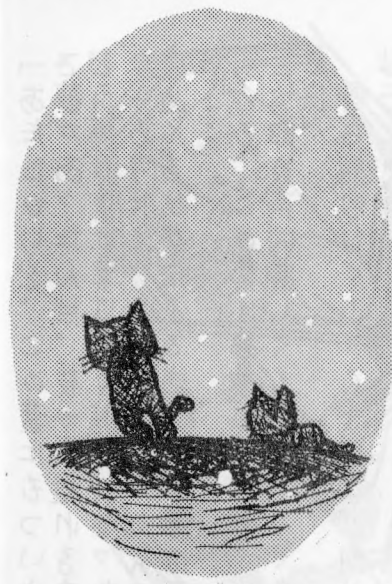
「ようし、みてるよ」再び三太はトランペットを吹くまねをしました。セッキヨリも胸を大きくはって吹きはじめます。軽やかに指が踊り、足がリズムをとります。風は銀の粉を吹きあげます。

枯葉も大きなスローアをえがいて二枚の葉が追いかけてこをするようにくるりと流れてゆきます。

そして、いつまでもいつまでも、音のない演奏会は続いていました。

いつまでも

いつまでも



え

「みなさん、またお目にかかります。前にお目にかかった人は、だいたい前でおきましたなあ。それから、どないおすごしでおますか。お元気ですか。ゆてらも元気で育っております。ゆてら、もうおかんの指いぬくほど大きくなりました。みなさん、びっくりするやろと思ひます。そらまあ、うっとこのおかん、猫にする和小さい方ですから、それに似てゆてらみんないふりで、うっとこの家のそばうろろろしている野良猫に比べれば、小さいんです。しかし、あの野良猫さんたち、ごっつ大きおまんあ。あれ、何食うてまんのやろ。そんなえもん食うてへんのとちやいますか。ほんま女々こえて、どうしてぶっしゃる。ほんま不思議するゆ。」

と

「ところで、ゆてらやと最近名前をつけてもらいました。ぶも、ゆてあんまり気にいらんのです。そらそうですが、なゆての名前『できんぼ』言いますねん。ひどい名前ぶっしゃる。ゆさんに言ゆす

と、わてがどこでもあし。こするから、どこかできが悪いんやと言うんぞすな。もう、えらい名前つけられてしもためさっはりゆやでおます。

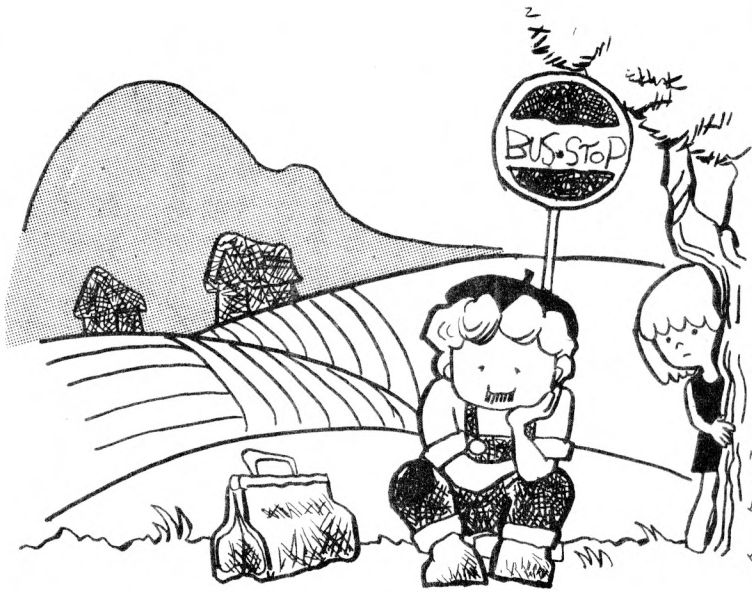
それから、茶じまの兄さんは「ビービー」言いまんぬん。兄さん何かあるとすもえらい名前つけられたもんぞす。さんで、ゆてら、しゃくやさかい名前をよばれても返事せんことにしとります。しゃあないけど、ほんまにひどい名前やぞ、もうさっはりゆや。

あ。それから、近頃うっこの家に于猫が一匹迷いこんできました。この于ビ、ビー兄さんさっくりでおましてな、あめて見た人はわからんくらいぞす。そら、兄さんの方が身体は大きいのですが。兄さんもおうじょうしとりますゆ。

そんで、この于ビよう食いまんぬん。ゆてらの食いぶち、みんな食てもうて、

山のバリエ

千原俊



それでもまた「くい」言いまんぬん。あれ、どないな胃袋してまんぬんのやろ。ぞすから、この于ビよう太って、ええ貫ろくしてまんや。もうゆやでおます。

ても、この于ビ、風呂がごっ嫌いなぬん。そらまあ、猫ゆうたら、もともと水はきらいぞすけど、こいつのいやがり方はもうそら、どえらいもんぞす。この間、あんまり汚いんで、ゆさんが風呂に入れたらうとしたら、もう水みただけで手足ごっばらかして、ゆさんをひっかくやらかみつくやらワーワーギヤギヤでもなんとか、どつき倒して入れました。んですゆ。ゆさん、しんどかったぞす。うなあ、うちらもあんまりゆさんに迷惑をかけんようせないかんと思うとります。ほな、また*****

へっぴぐく

トムさんは、さて、どうしたものかとあたりを見回しました。なにせ、来るつもりは全く知らない所へ来てしまっただけから、トムさんは絵描きぞす。前は大きな街を仕事をしていましたが、ふらりと旅に出て、いゝんな所を歩きながら絵を描いているのです。

ふらりと降りた田舎駅から近くの街へ行くつもりだったのに、バスを間違えて知らない所へ来てしまっただけぞす。もちろん、折り返しのバスに乗ればよかったです。まさかゆれが最終とは知らなかった。トムさんぞすから、しかたありません。

とにかく、今夜泊る所を見つけなくてはなりません。でも見た所、このあたりは狭い谷間にぞ、て畑が段々に重なるように山にへばりつき、所々に家が見えるだけの山村ぞす。宿屋など見付けられずうにもありません。

さて困った、赤の他人が突然訪ねて来て泊めて下さい、なんて言っただけで泊る所なんてあるかなと、トムさん思案にくれていますと、突然、

「おじさん、どうしたの？」と声がしました。見ると、小学校くらいの女の子が立っています。

「やあ、今日の最後のバスが行っちゃってぬ。この辺には知っている人もないし、今夜どうしようか、困っているんだ。」

それを聞くと女の子、首をちよっとかしげて、少し考えてから

「ふうん、大変なんだ。泊るんならあたし知ってるけど、少し遠いよ。」

「えっ、宿屋でもあるのかい。」

「ううん、村はずれのほら、あの山のふもとだけど、山じいって呼ばれてるおじいちゃんがいるんだ。猫師がなんかでさちよっ、と変わりもんで、あんまり村にもおりにこないけど、たまに山に入る猫師なんか泊めるみたいよ。」

女の子は少し遠いと言ったが、多少足には自信のあるトムさん、行ってみることにしました。

その家は古いかやぶきで家の前に、中くらの犬が寝をべっていました。山じい、というのは、もうずいぶんの年に見えましたが、歩いたり何かしたりする

ように思います。あの音も水音といっしよに泉の方からきこえてきます。

近づいてそっと木の間からのぞいてみますと、泉のほとりにうすくまっている山じいの後姿が見えます。目をこらすと、山じいの足もとには、たぬきやきつね、りすやかもしか、それにトムさんの知らない動物までが、うすくまっています。トムさんには何が何だか、さっぱりわかりません。と、その時、山じいが体を動かしてトムさんの方に横顔を向けました。

そのとたんトムさんは、「ヒエツ」と声を上げて、しりもちをついてしまいました。びっくりしてさわぎだした動物たちを一頭一頭背中をなせてなだめている山じいのその頭には一対の角が、生えているのでした。トムさんは逃げだしそうとしましたが、足がふるえて動けません。

その時、そのオニの山じいが話しかけてきました。

「トムさんじゃな。残念じゃ。この村に来てからもうずいぶん長いこと静かにくらししてきたんじやが、村人をなく、旅の人に見られてしまうとはのう。恐がらん



時は、とてもきびきびしていたし、あまり口をきかないので、本当の年は分りかぬました。トムさんが訪ねていって、村できいてきたのだけれど、今夜泊めてもらえませんかと言ったときも、じろじろと見ただけ。

「まあ、ええじゃろ」と言っただけで別に何もきくでもありませんでした。

夕食も終り、床に入って夜もだいたいふけた頃でした。トムさんは何かおかしな物音に目をさましました。向かが遠くでうなっているような小さな音でした。山犬とかそんなものとは違います。気がなっしてしかたがなく、起き出して見ました。すると、山じいの床も空になっっているのに気がつきました。どうやら外へ出た様子です。あのおかしな音も外から聞こえてくるのでした。

トムさんも外に出て見ることにしました。外はおどろくほどの月明りでした。用心しながら、音のする方へ歩いて行きます。家の横の牧小屋のわきから山へ入る道をしばらく入っていくと、水の流れる音がきこえてきました。そういえば夕方山じいが家の裏の泉の話をしていた

でもええ。オニが怖いもんだと聞いたのは、昔のどこのオニに出会ったことのない人間での。それからわいらオニとももずいぶん迷惑したもんじゃ。山の動物は正直での。人もけものも、取って喰うようなもんになうもなつきはせんじやろうな。

トムさんは自分がいらぬことをしてしま。たような気がして「山じい……」と言いかけてましたが、すぐに山じいにさえぎられてしまいました。「なにも言わんでええ。人に見られたんじや、どの道ここにはおれんからかう。しばらく山にこもって、また静かにくらせる所を見つけるとするか。う。おまえさんも元気で。そういうと、オニの山じいは外見の年には、似合わぬ身軽さで木々の奥へと姿を消してしまいました。山じいは時々本当の姿に戻って動物たちを相手に、さびしさをまぎらしていたのさしよう。たとえ、旅の人間であるうとその姿を見られたからには、ここにいるわけにはいかなかつたのです。朝になって、目をさましたトムさんは

夕べのことでもまだ頭が、ぼろぼろとしていました。とうやう帰って来たのかも覚えていません。でも、山じいの床は夕べのまんま空っぽです。トムさんは、冷たい水で頭をしゃきとさせると朝ごはんをつくりました。もちろん犬の分も忘れずにです。

後片付けをすませ、トムさんは出かけることにしました。荷物をまとめ、家を出る前に頭に手をやります。大丈夫、角は髪の中に引込んでいます。その頭にベレー帽をちよこんとのせると、トムさんは元気に山を降りて行きました。



トムさん



かきこぼる

ある日曜のお昼のひと。僕は何のあてもなく、ゆっくりと歩はすれの道を散歩してました。

2月とは言、これも午後の陽差しはふわりと暖かく、集い流れる風達はさわわと空の下を渡、ゆきまきました。そしてその風達は陽の光の冷いほどの鋭さを摘みと、こぼれ、後に真綿の柔らかなさの空気を春の先触れを待ち焦れる木々の隙間へと残してゆきました。上では流れる雲が、それが無ければ眩し過ぎるかもしれない空の青に心とむ背景の役割りを与えていました。二んな季節の中にある自分をみつけたとき、人は生きていく事の優しさに気がつくのでしよう。

つまり僕はお天気の良さに酔ってしまい綱系のシャボン球の心境でふわふわと歩いてたのでした。

ココン ココン
ココン ココン
ココン ココン

その足音が聞こえ出したのは、公園横のポストを左に折れた頃からでした。それはとても軽く調子の揃った足音でした。

子供か2人肩を並べて足を交互にして歩いて
 いるのを想いながら僕は歩いていました。
 ところか、そのうち僕は気づいたのです。
 子供の歩幅でその歩調で歩いていたら、
 僕はずっとくにおの足音をひきはなして
 いるのだらうと言ふ事を。
 その足音は、僕のすぐ後ろをずくと一定
 の間隔でついて来るのでした。
 だんだんと僕の心は背中へ背中へひき
 つけられてゆきました。
 そのうち、こちら切れなくなり、市場の
 前に来たところと突然立ち止まると、くる
 りと後ろを振り向きました。するとそこ
 には(うわあ?)ピンクのキリンがまんま
 るな目を僕に向けて立っていたのです。
 その小さなキリンは、これ僕より
 背が低いんですよ。これもピンクのひか
 びか光る長靴をはき、ばつが悪そうに体を
 もじもじさせていました。
 「ゴ・ん・に・ち・わろ」と、キリン
 の方から先に口を切りました。
 僕は、昼の日にキリンに挨拶を、それ
 もピンクのキリンに挨拶をされる筈とい
 う経験はついぞしたことか無かつたもので、
 しはらくは何と言ったか無かつたもので、
 たら良いものか考えあ

ぐねていました。すると、またキリンが
 「あ・の・……」
 急に僕は、そのときれときれの口調がと
 こもキリンに似合っている様子がして、
 スツと笑ってしまいました。すると、キ
 リンは「あ、何かおかしいですか？」
 と聞くのです。
 「いや、別に。」と、僕は答えました。
 「全然、そういう事じゃありません。キ
 リンにも手があつたら、と、おきの笑顔
 で握手をしてあげたい……そんな気持ちでし
 た。」
 「と、どこぞで、僕に何か……」と、僕。
 「え、ええ。そうなんです。」
 「……？」
 「つまり、ええと……あなた、鍵をお
 持ちじゃありませんか？」
 「鍵？ 鍵？ 何の鍵なの？」
 「ええと、つまり、ほら。」
 すると、僕の心に森と草原に向かつて開
 け放たれた窓のイメージが浮かびました。
 それは、懐かしさと淋しさと今はもう忘れ
 てしまった風の匂いと、そして甘くほろ苦
 い味とを思い出させる風景でした。けれ
 ども、鍵という言葉にはぼやけた顔の余韻

の、かすれた感情がただあるだけでした。
 「う……うん。僕、鍵の事は知らない
 の。みたんだよ。……」
 「え、そんなはずは無いですよ。もう一度考
 えてみてください。……」
 「いや、やっぱり知らぬ。……」
 僕は、見つめるキリンの視線を避ける様
 子に顔をむけました。
 「……」
 お願ひです。私の目を見てください。
 そのキリンの声があまりにも悲しそうだ
 ったので、僕は言われるままにキリンの碧
 色の目をのぞきこみました。
 するとキリンは僕の頭の中にすたすと
 はいって来ました。頭のまん中でキリン
 は立ち止まり、くるりと首を回して、
 「……」と探させてください。……
 「……」と探させてください。……
 「……」と探させてください。……
 キリンは、しばらくそんな事をしていま
 したか、やがてきききききききききき
 わすとハッと気がつき、ずいっと奥の方に
 ある藍色のモヤの中へと姿を消しました。
 ち分もたつたでしようか。僕がそのモ



(41)

(40)